



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Sur la situation actuelle de l'enseignement de la philosophie au Japon
Author(s)	Kassai, Akira
Citation	北海道大学人文科学論集, 14, 79-86
Issue Date	1977-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34335
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_PL79-86.pdf



Sur la situation actuelle de l'enseignement de la philosophie au Japon

par A. Kassai

はじめに

昨秋、文部省の在外研究員として2ヶ月間ヨーロッパに出張し、フランス、オランダ、ルーマニアの各国を歴訪して専攻する西洋近世哲学史の研究と資料収集に従事することができた。

フランスでは、パリ大学第四のP. メナール教授と、リヨン大学からソルボンヌに移ったばかりのローディス・レヴィス教授、ポワチエ大学のJ. ドント教授と会えた他、国立図書館(Bibliothèque Nationale)での手稿類の研究に所期以上の成果があった。

オランダではアムステルダム市立大学とライデン大学の附属図書館でスピノザ及びデカルトの書簡手稿についての調査と資料の収集ができた他、デカルト、スピノザの旧居などを各地に訪ねることができた。

ルーマニアでは旧知のアカデミー会員C. グリアン教授に会え、滞在中毎日お宅で懇談できた他、ブカレスト大学の哲学史学部の三人のスタッフとも会うことができた。

フランスでお会いできた方々のうち、メナール先生には、既に、札幌に来られた際お目にかかっていて、その日本びいきのご様子は知っていたが、パリ大学第四の随一の人気教授でもあり、かつ、新学期をひかえて極度にご多忙だったにもかかわらず大変親切に受け容れていただき感謝の他はなかった。国立図書館への紹介状も先生に書いていただいた。

フランスにおけるヘーゲル研究の第一人者であるJ. ドント氏にも、パリで自宅とレストランに招いていただいた上、ポワチエのお宅でも接待をうけ、ポワチエ大のヘーゲル・マルクス資料研究センター(氏は前所長である)の調査の際も案内役を引きうけていただき、さらに、氏の車でポワチエ市内の名所の案内までしてもらった。何でも、氏の所を訪ねた最初の日本人だとのことで夫人ともども大変歓待して下さった。フランスでは後にも書くようにヘーゲルの研究が大変流行していたが、氏を通じて見たフランスのヘーゲル研究の水準は正直に云ってそれほど高いものとは感じられなかった。何よりも、ドイツ語圏の研究をルカーチ、ブロッホなどを除いてあまり利用しておらず、フランクフルト学派にも全く注意を払わないなど、わが

国での常識から見て大変意外な点も多く、マルクス主義への関心とやや短絡させすぎる傾向も感じた。フランスのヘーゲル研究は主としてイポリットのそれから出発していて、ドント氏もその高弟の一人だが、ちょうど、前世紀にカント研究が始められた際の状況とよく似ており、未だ本格的な研究は緒についたばかりのようだった。所蔵の資料についても、その研究や翻訳作業の精力的な割りには不十分なものだったように思う。氏の話の中で感じられる中国の現状への鋭い関心も印象的なものだった。

ルーマニアではブカレスト大学の、前記の三人の、世代を異にする教授たちとの懇談を通じて、揺れうごく東欧の心に触れえたように思う。主として枢軸側に立ち、一時はドイツ軍の占領下にもあって、ドイツ語の使用を強制された、第二次大戦前から戦中にかけての世代に当たる老主任教授はグリアン氏の親友ということだったが、フッセルの研究から出発して、今も、マルクス主義の立場から現象学派の研究を行っていた。戦後間もなくの世代にあたるアンドレアゾフ教授は、ソヴィエト哲学の影響下に、西欧中心でない“世界哲学史”というソヴィエトで定式化された構想のもとでのインド哲学の研究に従事し、今それを中国の思想史に延長して行こうとしていた。自主独立路線の確立した時期に研究をはじめた若いカザン教授は、フランスに三年留学した後に、ソヴィエト流でない現代マルクス主義の研究をおこなっているとのことだった。この世代ごとのきわ立った相違、にもかかわらず、一貫してマルクス主義の立場を堅持しようという努力、また、哲学史学部最終学年には主としてルーマニアの哲学史を学習させるという話、フランス文化に関心が集中しているらしいラテン系の国としてのルーマニア文化の素顔、首都の至るところで感じとられた中国の大きな威信、などは極めて興味深いものだった。(以上については、本学評議会に提出することを義務づけられている海外出張の報告にも書き、その報告書も近く印刷配布されとのことなので、ここではできるだけ重複を避けることにしたい。)

本稿では、今回の海外出張に当って最も当初から重点を置いていたデカルト研究の調査のためお会いしたローディス・レヴィス教授との出会いと、その場所となったパリ北郊シャンティエの学会の模様を中心に記して、出張のご報告に代える次第である。

フランスにおけるデカルト研究は、古くは20年代からのE. ジルソンの画期的な研究にはじまり、J. ラポルト、および、H. グイエ、M. ゲルーらを経て、F. アルキエと、前期のG. ローディス・レヴィス女史を中心に発展して来た。友人で、日本におけるデカルト研究のリーダーといえる所雄章君の勧めもあって、彼が“本もの”と推賞するローディス・レヴィス女史にリヨンでお会いすることを今回の出張の主たる目標の一つと考え、できれば、ソルボンヌにいるアルキエ氏とも会談したいと思っていた。ジルソンはアカデミー・フランセーズに、グイエ、

ゲルーもアカデミー・デ・シアンス・ポリティク・エ・モラル入りをしていて引退しており、ラポルトは早くに死んでいるので、この両者がいわば第一線の現役である。この両者に会えばフランスにおけるデカルト研究の現状やその特徴的な点などもよく分るだろうと思ったからである。しかし、予期していたのより一、二年位早目に海外出張の順番が廻って来たせいもあって、出張手続を文部省に対して慌しくとっている間には、待ちのぞんでいる女史からの返事は仲々届かなかった。いよいよ出発の直前になって、やっと返事も届き、事情も判明した。アルキエ教授は定年をひかえて、アカデミー入りが決まり、ゲルーは死去し、マダム・ローディスはアルキエ氏の後任として、難行した人事の末に、リヨン大学からソルボンヌへ転任することになったとのことであった。そのため、女史は、五月末の新しい紛争で遅れた期末試験を片づけるかたわら、10月からのソルボンヌへの転出に伴う諸雑事も片づけねばならず、パリーリヨン間を往復しながら極めて多忙な日々を過されていた由だった。この返事の中にはまた、リヨン市の住居は当分引き払わないが、(今年亡くなられた夫君はリヨン市に職を持つ技術者だった)、パリ市内にもアパートマンを持ち、かつ、9月中には数回にわたりパリにやって来ており、とくに、10月11日から13日にかけてパリ郊外のシャンティでの学界に出席する予定でいる、従って、あなたが望むならば、先づパリで最初に会うことにしてはどうかと書かれてあり、小生が滞在を予定している9月仲頃から10月一杯にかけての女史の日程も詳細に示されていた。

待ち望んでいた返事を手にして、直ちに、9月中にも、ご都合の良い日時にパリで先づお会いしたい、また、シャンティの学会でのご講演をも拝聴できれば幸いである旨を書き送ったところ、小生が、パリの宿である“大学都市”の“国際館”に落着いて数日后に、次のような便りが早くも届いた。

手紙は、パリ大学第四の教授で、“Les Etudes Philosophiques”誌の編集主幹でもあるP. オーヴァンク氏からの9月19日附のもので、このたびマダム・ローディス・レヴィスからの便りで、あなたがパリに滞在中であることを知り、シャンティにおいて10月11日から開かれる学会に同学会の幹事役としての資格でご参加をお願いする次第であり、同封の学会の趣旨、日程も読まれ、ご都合を秘書のデナミ嬢までご返事賜わりたいと書かれてあった。同封の学会の開催趣旨を読むと、ケルンにあるティッセン財団資金の援助により“今日における哲学の役割と機能”というテーマのもとに、各国のさまざまな思潮を代表する哲学者たちの国際的な討論を上記の日程でシャンティで催すことになった旨が記されており、報告と討論の持ち方、発表者の名前とテーマ、さらに招待者の名簿が同封してあった。報告者は4名で11日夕、12日午前、午後、13日午前に各1名の極めてゆつくりとした日程になっており、参加者は充分な懇談と意見交換の機会が持てるようになっていた。

報告者は、C. ブリュエール氏がヘーゲルについて、F. ジャック氏とH. レヴィナス氏が現象学について、M. アンリ氏がヘーゲルとマルクスについてそれぞれ発表することになって

いた。ローデイス・レヴィス女史の発表がないのは大変意外だったが、発表者はジャック氏を除いてはいずれもよく名前を知っており、著書にも目を通したことのある日本でも著名の学者たちで、かつ、テーマも大変興味深く、また、ヘーゲルに関するものが多いことなどは、すぐ後で訪ねる予定のドント氏との会談に予備知識を得るという点でも大変好都合であると思われたので、すぐ参会を申し出ることにし、ついでに招待されている参会者のリストに目を通すと、上記の発表者の他に、パリ大学のY. ベラヴァル氏、ナンテール分校のJ. ドロム女史、ニース大学のE. ヴェーユ氏らの名前がアルファベット順に20数名並んでいる中に、A. KASSAI (Japon)とあったのには肝をつぶした。

小生よりも一寸早く、2年間の留学を予定してパリに来られていた、一橋大学の福居純さんにもご相談した。招待を受ける以上は、単に報告を拝聴するのみでは済まないだろう、恐らくテーマである“今日における哲学の役割と機能”の日本における状況もかなり懇談の中で尋ねられることになるだろうから、フランスの学者の平均的な日本思想史についての知識を予想しながら、それに答えられるように予めざっとしたリポートを作って参会者に配布しておいてもらった方が、小生の貧弱なフランス語の力から見ても安全であろうと考えた。そこで、Bibliothèque Nationaleに隔日くらいに通うかたわら、大急ぎで、日本の思想史の要約、とくに、仏教や儒教との関係、また、明治以後の西欧思想の受け入れ方の主たる特徴と戦後の動向、その中の哲学教育のあり方などを、かいつまんで記した、大判便箋30ページ程の仏文の報告を一週間ほどの間に書き上げ、要旨を附して、参会者への配付を頼むことにした。

これに対して、間もなく、詳しい日程などの連絡事項と、各報告者の報告の全文又はレジュメを同封した返事が届き、小生の報告書を学会の際に発表してはというお勧めと、報告書かレジュメのいずれかを“Les Etudes Philosophiques”誌に利用させてもらいたいという依頼を書いて来たが、後者の方は喜んで承諾し、前者の方は拝辞させてもらうことにした。学会での報告の詳細は、幹事役のオーヴァンク氏が上記の雑誌に載せることになっているので省略するが、フランスにおける最近のヘーゲル哲学研究の流行の状況とその理由について、参会者中のヘーゲル哲学の専門家ブリュエール、アンリ、ジャンコー氏らと懇談ができたこと、現象学派のフランスにおける動向の特徴についてティリエット、レヴィナス氏らに聴くことができたこと、フランクフルト学派の最近の状況と西ドイツの思想界の様子についてフランクフルト大学から来ていた若いリュプナー氏に尋ねることができたことなどは望外の収穫であった。

もとより、当初の目的だったローデイス・レヴィス女史とは、割当てられた宿の部屋も隣り合せて、暇を見てはお邪魔してデカルト研究についてご教示をいただくことができ、その後、ソルボンヌの一角のサン・ジャック街の小さなアパートマンでの心あたたまる会談や、ソルボンヌの女史の研究室や、附属の図書館での諸種の調査についての行き届いたご指示などへのよいきっかけが得られた。ヘーゲル研究についての前記のような評価に比べ、デカルト研究の水

準は予想以上に高く、日本を含む世界各国のデカルト研究の状況も充分につかんだ上で、それら全体を指導しようという使命観すらうかがわれた。出発直前に、前記の所君と相談し、短い滞在の間に恐らく解答がえられ、日本の研究者たちも知りたがっている、デカルト研究上の問題点として、デカルトが生前使用していた聖書の版についての質問も携えて行ったが、これについては、すぐに、パリ大学大学院 (Pratique des Hautes Etudes) のコスタベル教授を専門家として紹介して下さった。滞在中には、この疑問への結着はつけられなかったが、コスタベル神父の送ってこられた該博な知識とゆるがせにしない調査に裏づけられたご返事には深い感銘をうけた。コルベール街に氏を訪ねて、手渡した小生の質問に対して、コスタベル神父は、デカルトの全集の当該するであろう全箇所を短時日の間に精査して、暫定的な解答を寄せてこられた。

シャンティの学界の際には、有名なシャンティのシャトーを利用して作られたホテルと、ジェジュイット教団の研究施設からなる Les Fontaines と名づけられた建物と、それを取り巻く広々とした森の中で、ときには小径を辿りながら、ときには、サロンでコーヒーをすすりながら、フランスの代表的な哲学者たちの何人かとかわすことのできた会話は貴重な思い出となっている。お会いできたすべての人々とくに親身なお世話をいただいた、メナール先生、ローディス・レヴィス女史、ドント氏には心から感謝している。

ここに附録として印刷に附していただくことにしたのは、上記のシャンティの学界の際に参会者に配布され、相応の反響のあった小生の報告の要旨である。編集委員の本田さん、田中さんのご好意には感謝の他はない。

L'enseignement et l'étude de la philosophie, au sens occidental du terme, a pris naissance il y a une centaine d'années, à l'époque de l'ère de Meiji, soit au commencement de la modernisation du Japon.

A cette époque, le penseur occidental le plus familier était Jean-Jacques Rousseau et le *Contrat Social* figurait parmi les ouvrages les plus répandus au Japon. Cependant, un des disciples du traducteur de Roussau au Japon, Kôtoku, ayant été condamné à mort à la fin de l'ère de Meiji, l'influence de Rousseau alla décroissant pour être finalement stoppée net une trentaine d'années plus tard.⁽¹⁾

A l'influence de Rousseau succéda bientôt celle de l'utilitarisme anglais.

Cependant, il y a 400 ans, la pensée traditionnelle japonaise était caractérisée par deux

traits fondamentaux : l'absence de sens eschatologique et le culte de toutes les choses naturelles (en sorte qu'il y aurait eu huit millions de dieux). Puis, deux siècles plus tard, le bouddhisme fit son apparition au Japon. De pur qu'il était au départ, le bouddhisme fut bientôt "japonisé", cette japonisation consistant dans la confusion du bouddhisme avec l'animisme ci-dessus décrit et nommé "Shin-tô" ou "Shin-dô" (la voie des dieux). L'effet principal qui en resulta fut la perte du nihilisme qui avait été essentiellement au centre du bouddhisme indien. Vers le douzième siècle, cette réforme du bouddhisme était accomplie. On avait inventé le zen-bouddhisme pour la classe sociale supérieure, la secte de nichiren-shû pour la classe moyenne des samourais et la secte de jôdo-shû et jôdo-shinshû pour la classe inférieure dont la plupart était paysans. Cette tradition de pensée essentiellement japonaise a conservé toute son efficacité jusqu'à nos jours et les croyants de Shinran représentent près de la moitié des bouddhistes japonais⁽²⁾. La quête d'un nouveau dieu n'est donc pas nécessaire d'autant que lorsque quelqu'un meurt au Japon, on dit qu'il est "devenu un boudha" : la mort n'est pas une fin, mais un devenir, une genèse. Même à l'heure actuelle, lorsqu'on dit un artisan passé maître dans son métier qu'il est un dieu ("kami-sama"), c'est une fonction de la philosophie ayant encore son efficacité dans la pensée japonaise qui est visée par là.

D'après que le gouvernement, il y a environ quatre-vingt ans, à l'ère de Meiji, a choisi la voie du militarisme prussien, la philosophie a revêtu une autre signification. Tout le nouveau régime s'est en effet construit en suivant l'exemple de celui de l'Empire prussien et le système de l'éducation nationale, qu'il s'agisse du primaire ou du secondaire, imitait intégralement celui de l'Allemagne. Le cursus de l'école primaire durait, à l'origine, quatre ans, puis passa à six années; celui du secondaire durait cinq ans ; le supérieur trois ans, enfin l'Université trois ans également⁽³⁾. L'enseignement de l'éthique ("Shû-shin") était inclue dans les cours primaires et secondaires, mais son contenu était seulement celui de la philosophie de Confucius un peu déformée. Environ 5 à 10% des enfants accédaient au secondaire. Quant à l'examen d'entrée dans les écoles supérieures, seuls 5 à 10% des élèves le réussissaient, en raison de sa difficulté. Tous les écoliers ayant accompli leur formation dans les écoles supérieures pouvaient entrer à l'Université⁽⁴⁾. Leur rôle était de former une poignée de cadres⁽⁵⁾ qui, pour l'essentiel, choisissaient le Droit et l'Economie Politique, accédant ainsi aux postes les plus élevés au sein des entreprises régies par l'Etat ou de l'administration.

L'enseignement de la philosophie occidentale n'était donné qu'au niveau de l'enseignement supérieur et seuls les étudiants de lettres pouvaient en bénéficier. Naturellement cette élite s'efforçait de lire les textes de Kant, de Shopenhauer ou de Nietzsche.

A la faculté, à côté du département de littérature japonaise et étrangère et de celui d'histoire japonaise, orientale et occidentale, figurait celui de philosophie occidentale et orientale. Là, un enseignement authentique de philosophie était donné à un nombre d'étudiant de 5 à 10 dans chaque Université.

Jusqu'à il y a une trentaine d'années, le contenu de l'enseignement philosophique a été également très limité : les professeurs n'étudiaient que l'idéalisme allemand qui était la philosophie officielle. La philosophie était donc considérée comme une discipline réservée à l'élite. En outre, les termes techniques propres à la philosophie allemande étaient eux-mêmes très difficiles et très différents de ceux de la vie quotidienne. En les traduisant, les professeurs de cette époque s'efforcèrent de les rendre par des termes plus familiers jusque là des livres classiques orientaux, surtout de ceux du bouddhisme, lesquels n'étaient aucunement familiers au peuple japonais. Le néo-kantisme et l'historisme étaient également étudiés et leurs textes activement traduits. Ainsi Rickert, Windelband, Max Weber étaient-ils très diffusés à cette époque. Pourtant, c'était là la philosophie des professeurs et non celle du peuple japonais qui avait sa philosophie pratique pour sa vie.

Depuis la fin de la Seconde Guerre Mondiale, l'enseignement de la philosophie occidentale se pratique dès le secondaire et la "philosophie nationale" n'est plus l'idéalisme, mais le pragmatisme. A l'Université, tous les étudiants peuvent suivre, à titre facultatif, un enseignement de philosophie pendant deux ans. De fait, très nombreux sont les étudiants qui choisissent d'étudier la philosophie occidentale.

La philosophie constitue une préoccupation fondamentale non seulement pour les étudiants, mais aussi pour le citoyen de quelque couche sociale qu'il soit issu. Récemment, un garçon d'hôtel à Sapporo, la femme d'un chirurgien et un vieil homme de mon voisinage sont successivement venus me trouver pour me poser leurs questions sur le livre qu'ils étaient respectivement en train de lire : soit, pour le garçon d'hôtel, Sartre, pour la femme du chirurgien un ouvrage de Kierkegaard et pour le vieil homme un passage du *Phédon*!

De nos jours, l'enseignement de la philosophie semble également élargir sa sphère d'influence : presque 90% des élèves accèdent au cours secondaire et 50 à 55% de la même génération accèdent au cours supérieur, apprenant ainsi la philosophie. Compte tenu de cette nouvelle situation, de cette "popularisation" de la philosophie, sa fonction ne peut que changer et peut-être son rôle deviendra-t-il de plus en plus important. Cela traduirait, certes, le progrès de la philosophie au Japon, mais corrélativement, cela refléterait la crise que traverse la société japonaise, marquée par la perte d'un principe d'évaluation, par la reconnaissance de l'incapacité à "devenir un dieu".

A l'heure actuelle, la philosophie allemande, à l'exception toutefois de l'école de Francfort, a perdu sa toute-puissance, une partie des étudiants se tournant vers la philosophie analytique américaine, tandis que la plupart d'entre eux cependant subissent l'influence des différents courants de la philosophie française.

Le christianisme ou le marxisme ou quelque autre philosophie de l'histoire sont-ils susceptibles de changer la mentalité japonaise traditionnelle et de sauver le Japon de la crise profonde qu'il traverse, tel est le problème actuel de la philosophie au Japon.

(Rapport à l'occasion de COLLOQUE DE CHANTILLY, 11—12—13 Octobre, 1976 : sur "Rôle et fonction de la philosophie aujourd'hui")

- (1) Seule la littérature française a conservé son influence et, de nos jours encore, les romanciers favoris au Japon sont Stendhal, Balzac, Maupassant, Roger Martin du Gard, Sartre, Camus etc...
- (2) Shinran est le nom du fondateur de la secte jōdo-shinshū.
- (3) Presque tous les enfants de six ans entraient dans le primaire. Il n'y avait plus aucun analphabète au Japon. Tous les manuels scolaires étaient officiels.
- (4) Les Universités ont été établies par le gouvernement à l'époque de l'ère de Meiji. Au début, il n'en existait que deux : l'une à Tokio, l'autre à Kioto, puis, leur nombre passa à sept.
- (5) Leur nombre oscillant entre 1,500 et 6,000, soit 0,25 à 1% d'une même génération dont la moitié choisissaient des études de droit ou d'économie.